淺野裕一著

〔東洋學叢書〕

黄老道の成立と展開

刊行　創文社

夕の星

ちぎれ〳〵に雲迷ふ
夕の空に星ひとつ
光はいまだ淺けれど
思深しや天の海。

嗚呼カルデアに牧びとの
なれを見しより四千年
光はとはに若うして
世はかくまでに老いしかな。

またゝく光露帶びて
今はた泣くか人のため
つかれ、爭ひ、わづらひに
我世の幸は遠ければ。

（土井晚翠『天地有情』より）

目　次

序　説……三

第一部　黄老道の形成

第一章　卷前古佚書と黄帝書……一一
第二章　『國語』越語下篇の思想……一八
第三章　范蠡型思想と『老子』……三〇
第四章　『經法』の思想的特色……四九
第五章　『十六經』の思想的特色……六九
第六章　『稱』の思想的特色……八八
第七章　『道原』の思想的特色……九八
第八章　『管子』勢篇の性格……一〇五
第九章　『國語』の資料的性格……一一三
第十章　范蠡型思想の淵源(一)――『尚書』との關係……一二九
第十一章　范蠡型思想の淵源(二)――『國語』との比較……一三六
第十二章　瞽史の官と古代天道思想……一三六

第十三章　古代天道思想と范蠡型思想……一四四
第十四章　『老子』の成立狀況……一五四
第十五章　范蠡型思想と稷下の學……一七二
第十六章　黃帝への假託……一八三
第十七章　黃老道學派の成立……一九四

第二部　黃老道の隆盛

序……二〇三
第一章　『經法』の道法思想……二〇四
第二章　『管子』心術上篇の道法思想……二一二
第三章　『韓非子』の道法思想……二二八
第四章　申不害の法思想……二三二
第五章　愼到の法思想……二四〇
第六章　道法思想の展開……二五二
第七章　法術思想の形成(一)——商鞅の法術思想……二六四
第八章　法術思想の形成(二)——韓非の法術思想……二七二
第九章　秦帝國と法術思想……二九七
第十章　秦帝國の皇帝概念……三〇六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十一章　皇帝と法術……三三三
第十二章　黄老道の政治思想——法術思想との對比……三三七
第十三章　漢帝國の皇帝概念(一)——高祖の皇帝觀……三六一
第十四章　漢帝國の皇帝概念(二)——惠帝・文帝・景帝の皇帝觀……三七五
第十五章　「秦漢帝國論」批判……三九一
第十六章　漢の皇帝權力と諸侯王……四〇八
第十七章　漢の帝國運營と黄老道……四三四
第十八章　漢の重臣と黄老道(一)——曹參の場合……四四七
第十九章　漢の重臣と黄老道(二)——陳平の場合……四五九

第三部　黄老道の衰退

序……四七三
第一章　『伊尹九主』の道法思想……四七四
第二章　『六韜』の兵學思想——天人相關と天人分離……四九六
第三章　鄒衍の思想……五三〇
第四章　『五行篇』について……五五〇
第五章　『五行篇』の內容……五五六
第六章　『五行篇』の思想的特色……五八五

第七章　『五行篇』と子思・孟子學派……六〇六
第八章　『五行篇』の文獻的性格……六二〇
第九章　『五行篇』の思想史的位置――儒家による天への接近……六三一
第十章　董仲舒・天人對策の再檢討――儒學の國教化をめぐって……六五一
第十一章　武帝の統治と黄老道の衰退……六七七
あとがき……七〇五
索　引……7～20

黄老道の成立と展開

序　説

道家思想は、老荘思想とも稱される如く、ほとんどの場合、老子と荘子を中心に据えて、その性格が檢討されてきた。兩者の思想的な水準の高さと、後世に及ぼした廣汎な影響からすれば、これも當然の現象と評し得る。しかし、こうした狀況が生じた背景としては、さらに別の要因をも考慮しなければならない。それは、『漢書』藝文志に三十七家、九百九十三篇と記錄される道家の著作の大半が散佚した中で、『老子』と『莊子』のみが比較的完全な形で殘されたという、文獻上の制約である。勢い道家思想の研究は、最も資料の安定している、老子と莊子を軸として進めざるを得なかったわけである。

この結果、道家思想が何を起源にして發生し、いかに展開して行ったのか、との思想史的視點から、改めてこれまでの道家思想研究をふり返るとき、そこには老子と莊子のみが言わば唐突に聳え立ち、その前後は極めて漠然としたままに終わっているとの印象を拭い難い。

すでに我々は、『莊子』天下篇や『漢書』藝文志の記述により、老子と莊子以外にも、田駢・彭蒙・愼到・環淵・楊朱・宋鈃・尹文・列禦寇等々數多くの思想家が、道家の思想的系譜を構成していたことを知っている。さらにまた『史記』や『漢書』の記載によって、漢初に黃老道が一世を風靡し、ついに漢帝國の中心思想の座を占めるに至った事實をも知っている。とすれば、當然こうした諸思想の解明なくしては、道家思想の展開を全體的

には辿れないことになる。それにもかかわらず、これらの諸思想はいずれも據るべき基本資料の亡佚が障害となり、道家思想の形成と展開に果たした役割を充分に位置づけられぬままに、極めて簡略な扱いに甘んずる事態を餘儀なくされてきたのである。

本研究はこうした狀況を承けて、道家思想の有力な一派であった黄老道を對象に取り擧げ、その思想的特色や、形成と展開の足跡を考察せんとする試みである。黄老道とは、人物としては黄帝と老子、書物としては黄帝書と『老子』を一括した呼稱である。だがこれまでは、一方の柱である黄帝書の側が全く亡佚してしまった事情が災いして、思想の實態解明が極めて困難な狀況にあった。

こうした狀況の下で進められた研究の代表的な例として、津田左右吉氏が『道家の思想と其の展開』第四篇第七章の中で示している黄老の理解を見てみよう。津田氏の見解によれば、黄老とは、儒家の勢力が興隆せんとした文帝・景帝期、あるいは武帝の時代に、道家が儒家の堯・舜に對抗せんとして黄帝を道家の祖に据えたものであると言う。そして『漢書』藝文志が著錄する「黄帝君臣」は、漢代に入ってから、老子の言を補綴・潤色して黄帝から出たと稱する內容であったらしく、道家思想としては不純なものであるとも言う。この見解に從えば、黄老とは稱しても、黄の側は他學派への對抗心から加えられたに過ぎず、その實質は『老子』とほぼ同一であったことになろう。

また第五章「漢代の思想界に及ぼせる道家の影響」に於ても、黄老は、道家の學が儒家・墨家・法家などに對抗して、かなり廣く行われたことを示す一端としてのみ扱われ、その現實政治との關わりについても、「道家は宮廷に近づいてゐたと思はれぬでも無い」と、甚だ簡略な言及に留まっている。もとよりこれでは、黄老道と政治との具體的關わりは、何ひとつ浮かび上がってはこない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これに對して金谷治氏は、『秦漢思想史研究』第二章第三節に於て、黄老道に關するより詳細な考察を行っている。その中で金谷氏は、黄老とは道家思想に基づく政治技術を説いた道家の一派であると、その學派的特色を指摘し、政術の具體的内容として無爲清靜の政治を擧げている。金谷氏により提示された見解は、基本的に正鵠を得たものと考えられるが、やはり黄帝書の内容が不明であったため、黄老道の思想内容と無爲清靜の政治との具體的關係については、必ずしも明瞭とはなっていないように思われる。

ところが近年に至り、從前の手詰り狀態を脱して、黄老道研究に新たな局面を開き得る可能性が生じてきた。それは、一九七三年十二月に湖南省長沙の馬王堆三號漢墓より發掘された、帛書の出現によってもたらされた。この三號漢墓は、同時に出土した木牘が記す紀年から、紀元前一六八年、前漢文帝の前元十二年の造營と推定されている。この漢墓からは、總計十萬餘字に及ぶ大量の帛書が發見されたが、その中には二種類の『老子』寫本が含まれていた。中國ではこの二種の寫本の中、小篆に近い字體で書かれ、より古い時期に筆寫されたと思われる側を甲本、隸書に近い字體で書かれ、より新しい時期の筆寫と思われる側を乙本と稱している。そして甲本『老子』の後には、中國の研究者によってそれぞれ「五行」「(伊尹) 九主」「明君」「德聖」と名づけられた、四種の古佚書が付屬しており、これらを「老子甲本卷後古佚書」と總稱している。また乙本『老子』の前には、「經法」「十六經」「稱」「道原」の名稱を持つ四種の古佚書が位置しており、これらを「老子乙本卷前古佚書」と總稱している。(1)

これら計八種の古佚書の中、黄老道研究との關わりで特に注目されたのは、「老子乙本卷前古佚書」の側である。なぜならこれら四種の卷前古佚書は、いずれも内容的に道家思想に通ずる要素が見られ、しかも『十六經』には、黄帝とその臣下の名が頻出するからである。(2) そこでこうした特色から、四種の卷前古佚書は、亡佚して久

しい黄帝書の一部ではないかとの見方が興り、現在ではほぼ學界の大勢を占めるに至っている。

もし四種の古佚書が實際に黄帝書の一部であるとすれば、盛名の割には永らくその實態が不明であった黄老道の基本資料が、約二千年以上の時を隔てて甦ったわけで、我々はこれまでの道家思想研究の空白部分を、かなりの程度解明できる貴重な手掛りを手中にしたことになる。本研究も、やはり古佚書を黄帝書の一部と見なす立場から、黄老道の實態について、より一層の解明を目指すものである。

さて本研究は、以下のような三部構成を取っている。第一部では、黄老道の思想的特色を古佚書と『老子』の内容に卽して究明しつつ、思想として、また學派として、黄老道が形成されるに至った經緯を追跡する。第二部では、秦の法術思想から漢初の黄老道へと、思想の潮流が大きく轉換した原因を探るため、秦帝國と漢帝國の性格の差異に注目しつつ、黄老道と法術思想との關係を考察する。第三部では、前漢武帝期を一つの境として、黄老道が漢の中心的な政治思想の座を儒學に奪われ、凋落して行った原因を探るため、儒學が天人相關思想を取り込んで行く様相や、儒學が儒教へと變貌して行く經緯などに留意しつつ、黄老道と儒家思想との關係を考察する。

以上の構成にも明らかなように、本研究はある特定の時代を選擇し、その間の思想史全體を斷代史的に通觀する體裁を備えていない。黄老道の消長にのみ的を絞った、その意味では極めて視野の狹い研究に過ぎない。このように狹くテーマを限り、「黄老道の成立と展開」と稱しながら、その内部に法家思想や儒家思想に關する記述が三分の二近くを占めるのは、あるいは羊頭を懸けて狗肉を賣るものだとの誹りを受けるかも知れない。それを

覺悟の上で、敢えて本研究がそうした全體構成を採用したのは、特定の思想の性格・本質は、その思想のみを研究對象に据えただけでは充分に浮かび上がってこず、それと類縁的な影響關係にあったり、逆に競合ないしは敵對を通じて影響關係にあった、他の諸思想との比較によってこそ、換言すればダイナミックな思想史の流れの中に位置づけてこそ、初めて鮮明になるとする、筆者平生の個人的嗜好に由來する。

（1）これら帛書の全容が初めて公表されたのは、一九七四年に文物出版社が刊行した、『馬王堆漢墓帛書（壹）』と題する線裝本によってであった。これには帛書を景印した圖版と、馬王堆漢墓帛書整理小組の手に成る釋文及び校注が收錄されている。これによって帛書の內容は、內外の研究者に廣く公開されたのであるが、この釋文には誤りも多く、そのまま信用して讀解を進めるわけには行かない狀態であった。

その後一九七六年五月に、同じく文物出版社から『馬王堆漢墓帛書・經法』が刊行された。これは四種の卷前古佚書のみを單行させ、整理小組が校訂し直した釋文に、注や關係論文、古佚書と他の古籍との引文對照表などを併載したもので、その後の古佚書研究に多大の利便をもたらした。

さらに一九八〇年三月になると、今度は國家文物局古文獻研究室編の『馬王堆漢墓帛書（壹）』が出版された。書名は一九七四年版と全く同一であるが、こちらの方は洋裝本で、やはり帛書の圖版と釋文・校注とを收錄している。だが一九七四年版の刊行以後、帛の縮みが伸びたり、破片の本來の位置が推定されるといった變化が生じたとのことで、當初に較べ解讀可能な箇所がかなり增加している。そのため一九七四年版の釋文との間には、相當の異同が存在する。もとより釋文は、解讀者の判斷に左右される要素があり、一概に優劣を決め難い面が殘るが、テキストの狀態そのものとしては、一九七四年版よりもこの一九八〇年版の方が優れていると言える。そこで本研究に於ける古佚書の引用は、すべて一九八〇年版に基づき筆者が校訂したものを用いる。

（2）『十六經』は當初『十大經』と發表されていたが、一九八〇年版に至って『十六經』と讀正された。

第一部　黄老道の形成

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com